私の被災体験

小沢幸子（習志野台・59歳）

私は、墨田区向島に住んでいました。当時、尋常高等科二年でした。戦争が激しくなり、挺身隊として毎日近くの軍の靴を作っている工場で働いていました。ひたすらお国の為と思いながら、やがて三月九日の大空襲に合う事になります。

あの夜、サイレンの音と共にB29の爆音が聞え、焼夷弾が雨あられのごとく落とされ、あたりは火の海となった。隣組の人達と一緒に入っていた防空壕も危うくなり、皆で火のない方に逃げ始めました。その時の火の勢いは凄く、焼けた電信柱や家の燃えた火の固まりが体に落ちてくるのを払いながら、隣組の人達と皆、一緒に手をつなぎ、夢中で逃げました。ドブ川に架かっている橋の所までくると、消防署の人だったと思います。大きな声で、「その橋を渡ると死ぬぞ、そっちは風下だ、こっちにこい。」と、言う声が聞えたので、私達はそちらに逃げて行きました。

どのくらい歩いたかわかりませんが、気が付くと私達は大きな建物の中に入っていました。とにかくこの中にいる人は助かった、と思いました。後でわかった事ですが、その建物は消防署でした。

B29も立ち去り、やがて夜が明け、それまで口も利けずに黙って外を見ていた人達が、誰言うとなく、皆家の焼け跡に向って歩き出しました。まだ火が燃え、燻る中を橋まできてみた。そこは地獄。そこから先は「死人の山」それは口では言えない凄さでした。家の焼け跡に行くのにはそこを通らなければなりません。死人の山を乗越えなければ、先に進めないのです。その方達に手を合わせながら歩きました。

途中、ドブ川から生きもたえだえ助けを求める人、又家から逃げずにすわったまま、蒸し焼きになっていた人、それは見るも無残な姿でした。

やっと家の焼け跡に辿り着いた時、皆呆然と立ち尽くしてしまいました。でもそんなことをしていられないのです。その時は泣いてなんかいられませんでした。これから先、自分達が生きているからには、取敢えず焼け落ちた物を、と鉄類を探し出し、黒焦げになったナベ、カマなど拾い集め、それを大事に持って身内を頼りに、やっと千葉の布佐に落着く事が出来ました。

でもそれからが大変でした。まだ戦争が続いています。若い人が家にいると、いつ挺身隊で遠くに働きに連れて行かれるかわからないので、悲しんでいる暇もありません。一駅先の木下の木工場に働きに出ました。まだ空襲が続いています。サイレンが鳴ると防空壕に飛び込みました。敵機が低く飛び、近くにある飛行場に機関銃を撃ちまくる。その凄さ、敵機がさった後、いつも工場に棺桶の注文がありました。飛行場で犠牲者がでた時です。自分達も防空壕に入る所を見付かれば、銃で撃たれるかもしれないの

で、毎日がとても恐ろしい思いをしました。

そんな日が終戦まで続きました。戦後もいろいろな事がありましたが、それは私達だけでなく、お金のない人達は皆、大変でした。まだ書きたい事はありますが、口で話すのはできますが、書くこと、文才がありませんので、でも三月九日のあの日の事は私が生きている限り、この目に焼き付いた事は忘れられません。私の子供にも、しっかり話して聞かせてきました。今、平和でいられるのは、戦争で犠牲になった人達のおかげであると、私もあの時助かった命を、生きている限り大切にしようと思います。いつか書き残しておきたいと思っていましたが、この募集のおかげで書けました。

ありがとうございます。

